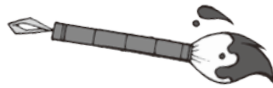


新・下野市風土記

華麗なる一族 外伝1



下野市教育委員会 文化財課

これまで数回にわたり、下毛野朝臣古麻呂しもつけのあそんこまろと、彼にゆかりのある人々の紹介をしてきました。栃木県に実在した人物の中で最初に史料に名前が登場する古麻呂本人に始まり、彼の仕事に関連して、奈良時代中頃の川内朝臣石代かわらのあそんいしろまで触れてきました。

今回からは、下毛野一族外伝として、奈良時代以降に生きた下毛野を名乗った人々について紹介していきます。

藤原の世

藤原不比等ふじわらのふひとが築き上げた天皇との姻戚関係を背景に、力を増した藤原氏は、藤原道長や頼通よりみちに代表される平安期の摂関政治まで、政治の根幹に君臨し続けます。長屋王ながやおうや菅原道真すがわらのみさねなど、藤原氏以外の優秀な人材は肅清され、政治の中枢からは疎外されました。

ここからは想像ですが、下毛野一族もその憂き目にあったはずで、古麻呂の活躍により平城京内に下野寺しもつけのでらを構えられるほどの実権をもっていた下毛野一族は、大人しくしていないと、

謀反や呪詛の嫌疑をかけられて断罪されかねませんでした。

この方法は、後に平家一族や鎌倉幕府草創期の北条一族、徳川政権、明治政府も使った手法です。反勢力になにかと因縁をつけて処分するのは、古今東西変わらないようです。

政治の中枢部の権力闘争については、その後政権を握った立場の視点で修正されていますので、本質的な部分や個人の心の動きを史料から読み取るとは困難ですが、そこが歴史のおもしろみなのかかもしれません。

平安時代のデモ行進

そのような時代でも、権力中枢部に対しての抗議・要望活動がありました。

平安末期以降、僧兵が朝廷に対して行った要求を強訴きやうそといいます。この強訴の際、奈良興福寺の僧兵が奈良春日大社の御神体である神木を担ぎだすことを神木動座、比叡山延暦寺の僧兵が近江（滋賀県）大津坂本の日吉大社の神輿を担ぎだし平安宮の御所の前で示威行動を執ることを神輿動座しんぎようどうざといいます。

『平家物語』巻一に、白河天皇が「賀茂河の水、双六の賽すごくさい、山法師やまほうしぞわが心にかなわぬもの」と、「天下三不如意てんかさんふにょい」を挙げて嘆いたと記されています。

賀茂河の水は、当時、頻繁に発生していた洪水で、自然災害です。双六の賽とは、サイコロの目で、現代では小学生でも知っている確率の問題です。どちらも、いかに天皇といえども意のままにはできません。

そして3つめの山法師が、この比叡山や興福寺の僧兵を指します。自然災害やサイコロの目と並べて天皇が嘆くほど、強力な存在だったので

しょう。

興福寺の神木動座行動には、いくつかの段階がありました。まず、全僧侶を招集して会議を開催します。会議により朝廷への要求を決議し、この要求（要望）書を朝廷に届けます。ここで要求が受け入れられないと、春日大社へ協力依頼をし、神木の遷座を行います。

この時点で、朝廷に神木動座の予告をします。ここで要求が認められれば、神木は遷座して終了ですが、引き続き要求が認められないと、神木を興福寺金堂に遷座し、戦の神様を祀る石上神宮（天理市）、吉野勝手明神（吉野町）にも神輿の派遣を要請、さらに東大寺や西大寺、薬師寺などの南都七大寺にも支援要請をします。

それでも要求が聞き入れられない場合、いよいよ出発です。興福寺の僧兵・衆徒が先頭に立ち、春日大社の神官・神人が続き、最後に近隣から動員された庶民が並びます。

松明が燃え盛り、法螺貝の音が響くなか、集団は京に向かいます。道々、破壊行為をするようなことはなく、御神体と共に歩む秩序ある戦いだったようです。